

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 5 月 28 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	教授	原田 隆史

研 究 題 目	公共図書館の多様な活動を評価する統合的指標の開発
---------	--------------------------

研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究課題は「資料」、「来館者」、「非来館者」、「知の拠点」、「図書館制度・経営」という5つの観点から、日本の公共図書館全体を対象とする大規模な質的・量的調査を実施することで、日本の公共図書館の現状を明らかにし、各館の置かれた状況に応じたベースラインを算出することを目的とするものである。</p> <p>2019年度は各観点について、以下の調査等を実施した。1) 資料：複数の公共図書館から貸出データの提供を受け、天候に応じた貸出冊数の変化や資料の特徴と貸出回数との関係等の分析を実施した。都市部では降雨による貸出冊数の減少が顕著であるものの、主な移動手段が自家用車と考えられる郊外では降雨の影響が少ないこと等が明らかになった。また、館内閲覧量の調査を一部図書館で実施した。2) 来館者：一部の公共図書館から来館者数データを受け、その推移と天候や季節、行事の実施等との関係を分析した。貸出同様の降雨の影響に加え、イベント等が一定の来館増効果を持つこと、小中高生の夏季休暇の影響が大きいこと、それを除くと春の来館者が最も少なく、冬は多いことなどを示した。3) 非来館者：来館者調査とも重なるが、国立国会図書館が実施した情報行動に関する Web モニタ調査の実施や解釈に助言・協力し、データの提供を受けた。4) 知の拠点：来館者調査とも重なるが、イベント実施と来館数の推移の関係分析等を一部図書館で実施した。5) 図書館制度・経営：米国における図書館評価指標の文献調査を実施し、日本ローカライズについて検討した。また、コスト・制度的状況分析について調査協力図書館を募った。</p>
------------------	---

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	②	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を **researchmap** (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、 researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。	更新日	2020年 5月28日
--	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 5 月 29 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	教授	児玉 祥一

研 究 題 目	グローバルシティズンシップと歴史教育
---------	--------------------

研 究 成 果 の 概 要	<p>2019 年度度においては、次期学習指導要領が告示される中で「地理歴史科」における新しい科目『歴史総合』の内容構成、学習過程に関して確認にし、阪大をはじめ歴史研究者との協力のもと、歴史学の動向や歴史教育学の動向を踏まえ研究を進めた。</p> <p>また、グローバルシティズンシップ教育が行われている諸国に関する文献調査を行うとともに、高大連携歴史教育研究会、京都高等学校社会科研究会、神奈川県社会科部会歴史分科会などの現場の研究協力を得て、これから行うべき新しい歴史学習のあり方、教授法などについて研究を進めた。</p> <p>なお、まとめの段階で covid-19 の流行のため、研究協力者との研究会が持てず、課題がいくつか残っている。</p>
------------------	--

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	③	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を [researchmap \(https://researchmap.jp/\)](https://researchmap.jp/) へ入力することとしています。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。 	更新日	2020年 5月29日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 2 月 20 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	准教授	中瀬 浩一

研 究 題 目	視線配布行動と授業省察を活用したろう学校若手教員の授業力の向上に関する縦断的研究
---------	--

研 究 成 果 の 概 要	<p>研究協力校において授業の記録を行い、開発した解析プログラムによる解析とその結果を用いたの授業後省察を実施した。</p> <p>大阪府立中央聴覚支援学校では、選定された若手教員への説明会を 2019 年 9 月に実施した。中学教員の授業記録は 2019 年 10 月に実施し、解析プログラムによる解析結果と授業後の省察を 2019 年 12 月に実施した。小学部では 2020 年 2 月より教員の授業の記録を行った（一部、本報告書提出日以降に実施予定）。</p> <p>奈良県立ろう学校においては、2019 年 11 月に中学部若手教員の授業記録を行い、解析プログラムによる解析結果の説明と省察を 12 月に実施した。また、2020 年 2 月末から 2 名の若手教員（高等部・中学部）の授業記録と解析・省察を実施する予定である。</p> <p>来年度は各教員に授業記録・解析・省察は 6 か月程度の期間を空けて再度実施する予定である。</p>
------------------	---

当該年度における研究計画達成度（以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。）

回 答	②	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 本学のすべての教員は、研究業績を researchmap (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。	更新日	2020年 2月20日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020年 3月 3日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	教 授	沖 田 悟 傳

研 究 題 目	学校力向上への、効果的・機能的なスクールマネジメントの在り方を研究する ～スクールリーダーの役割とスクールリーダーシップの在り方を考える～
---------	--

研 究 成 果 の 概 要	<p>我が国の学校組織体制は、長らく校長と教頭を管理職として置くほかは、すべての教職員は同列の位置付け、いわゆる「鍋ぶた」型の組織体制であった。しかし、今日の多様化・複雑化した教育課題への対応に向け、校長のリーダーシップのもと組織的・機能的な学校経営が行われるよう、2007年に学校教育法を改正し、新たなスクールリーダーとして、副校長、主幹教諭、指導教諭を置くことが可能となった。現在いくつかの学校で、このようなスクールリーダーが配置されているが、ねらい通り、期待通りの役割を果たしているのだろうか。また、新たなスクールリーダーが、その職責を果たすためには、校長としてどのようなリーダーシップを発揮し、学校経営を行う必要があるのだろうか。</p> <p>本研究では、学校力（質の高い教育活動を展開することを通して、児童生徒に対して質の高い教育効果を上げている学校の姿）の向上に向け、スクールリーダーの役割とスクールリーダーシップの在り方への考察を通して、効果的・機能的なスクールマネジメントの在り方を研究する。</p> <p>学校教育の主役は、児童生徒である。私は、児童生徒一人一人が生き生きと活動する学校、学校力の高い学校づくりには、次の3点が大切だと考えている。</p> <p>①校長のリーダーシップのもと、組織的・機能的な組織を編成し、効率的な学校経営を行うこと、 ②優れた教育課程のもと、授業改善（指導方法の工夫改善）を行うこと、 ③児童生徒一人一人の個性や能力、人権や自主性・自律性を尊重すること、である。</p> <p>私は、これまでからも京都府教育委員会の一員として、学校力向上を目指して『学校改善支援プランー質の高い学力を求めてー』や『やましる授業スタンダード』等を作成し、府内各小中学校に配付するとともに、各種研修会で活用し成果を上げてきた。また、教科書を執筆することを通して、教科指導の在り方や授業改善への道筋を示してきた。</p> <p>今年度は、これまでの私自身の取組や指示、指導助言をもとに、本研究のベースとも言える「スクールリーダーシップの在り方」に関して、教員の意識調査の実施に向けて、京都府教育委員会や各市町教育委員会、校長会等へのヒヤリング（情報収集）をもとにアンケート調査事項（調査内容や調査方法等）を確立した。</p> <p>さらに、地域は限定されるが、先行調査として小中学校 33 校に対して「スクールリーダーシップとスクールマネジメントに関するアンケート調査」を実施した。現在、次年度に予定している本格調査に向けての改善点等を分析しているところである。</p> <p>次年度は、京都府全域の小中学校においてアンケート調査を実施することで、さらなる研究を推進したいと考えている。</p>
------------------	---

当該年度における研究計画達成度（以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。）

回 答	②	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を [researchmap \(https://researchmap.jp/\)](https://researchmap.jp/) へ入力することとしています。

・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、 researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。	更新日	2020年 3月2日
--	-----	---------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2019 年 5 月 24 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	准教授	奥野 浩之

研 究 題 目	ICT を活用した中学校社会科における分野横断型憲法学習プログラムの開発
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究は ICT を活用した反転学習を実現し、憲法で保障された各人権を学習する中学校社会科憲法学習プログラムを開発することを目的とする。本研究における 2019 年度の成果は以下の通りである。</p> <p>(論文)</p> <p>博士論文「中等社会科における憲法学習プログラムの開発に関する研究」同志社大学、2019 年 9 月 奥野浩之・虫本隆一「e ラーニングを活用した反転型社会科憲法学習プログラムの開発」『同志社大学教職課程年報』第 9 号、2020 年 2 月、pp.3-20</p> <p>(著書)</p> <p>長瀬拓也・杉浦真理・奥野浩之・渡辺暁彦・松森靖行編著『ここから始める「憲法学習」の授業－児童生徒の深く豊かな学びのために－』ミネルヴァ書房、2019 年 5 月</p> <p>本研究は、2017 年度から 2021 年度にわたる 5 か年の研究である。学位論文では、本研究の基礎的研究に関する成果を発表した。しかし、昨年度と今年度前半は、学位論文執筆のため、コンテンツ設計、システム開発に十分な時間を割くことができず、当初の計画よりやや遅れている。次年度より、本研究におけるコンテンツ設計、システム開発を本格的に進めていく予定である。</p>

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	③	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を researchmap (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

<ul style="list-style-type: none"> ・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。 	更新日	2019年 5月23日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報(研究アイデア、知財情報、個人情報)の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

年 月 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	准教授	佐藤翔

研 究 題 目	書架注視行動の特徴と影響要因に基づく情報ディスプレイとしての書架デザインの検討
研 究 成 果 の 概 要	<p>電子情報源へのアクセスが容易になった現代、図書館の書架は情報探索のためのストックから情報を提示するディスプレイへと求められる役割が変化しており、書架上での見られやすい位置等、人の書架注視行動を明らかにすることの必要性が高まっている。特に書架上の垂直位置・左右位置によって注視頻度には著しい偏りがある可能性が示唆されているが、どのような条件の下で注視頻度の偏りが成立するのかについては必ずしも明らかではない。そこで本研究課題では、書架の高さ、通路幅（利用者と書架との距離）、照度等、異なる特徴を有する複数の図書館において、視線追尾装置を用いた被験者実験をタスクや被験者グループを変えながら複数回繰り返し、どのような要因が、どの程度、書架注視行動に影響を与えるのかを明らかにする。結果から、ディスプレイとしての書架デザインにおいて必要な要素を明らかにするとともに、既存の図書館空間のあり方を再検討していく。</p> <p>本年度はここまでの実験の成果をまとめ、国際図書館連盟 IFLA 年次大会と、図書館情報学分野の国際会議 ASIS&T 年次大会でそれぞれポスター発表を行った。また、愛知県豊橋市で行った実験の成果をまとめて『日本図書館情報学会誌』に投稿し、受理されている（2020 年度 6 月刊行号に掲載予定）。</p> <p>実験自体については本年度は昨年度から開始した VR 技術を用いた実験と、実験用書架を用いた実験室実験を中心に行い、図書館空間内での追加実験は実施しなかった。実験用書架を用いた実験では新たに、照明の効果の検証を開始している。</p>

当該年度における研究計画達成度（以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。）

回 答	①	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を researchmap (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

<ul style="list-style-type: none"> ・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。 	更新日	2020年 3月27日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 5 月 26 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	准教授	田中 希穂

研 究 題 目	教職課程履修学生の動機づけと職業アイデンティティ発達に関する縦断的研究
---------	-------------------------------------

研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究では、早期の段階での教職への意思や意欲・動機を把握し、学習動機とともにその推移をとらえ、教職関連講義や実践実習を通じた教員としての資質能力の獲得過程との関連を、入学から卒業、就職後までの縦断的調査によるデータに基づいて検討することを目的とする。</p> <p>2019 年度は、2018 年度のデータの分析をするとともに、2018 年度に実施した調査を継続し、2019 年 3 月から 5 月に開催された教職課程関連説明会および教育実践演習の講義において 2・3・4 年生のデータを収集した。また、4 年生においては学習動機づけ尺度を除いた調査票を用いて 11 月に追跡調査を実施した。</p> <p>2018 年度に収集した 2・3・4 年生 442 名データを用いて学年間の差異を検討した結果、教職課程の履修を通して、他者からの勧めのような外的な要因ではなく、自分自身が子どもを好きかどうかというような内的要因により教職課程を履修する傾向が向上し、外発的な動機づけが低下する傾向がみられた。このような傾向は、教師効力感の向上や教師アイデンティティの発達と関連することが示唆された。これらの結果は、日本発達心理学会第 30 回大会 (2019.03.17-19, 早稲田大学, 発表タイトル: 教職課程履修学生における動機づけ要因の発達の变化) および 7th International Self-Determination Theory Conference (2019.05.21-24, Amsterdam, Presentation Title: Development of student teacher's motivation, teacher-efficacy, and teacher-identity during teacher-training course) において報告した。</p> <p>教職課程への動機づけ要因が教育実習の経験をとおして教師効力感や教師アイデンティティの発達におよぼす影響を検討するために、2018 年度に収集したデータの内 93 名を対象に教育実習前後の変化について分析した。重回帰分析の結果、教職の社会的価値や子どもそのものに目を向けて教職を志望している学生は、教育実習を通して教師としての効力感やアイデンティティを発達させる傾向があった。一方、内発的に動機づけられて教職課程に取り組んでいたとしても、教育実習の経験が教職という職業選択を躊躇させる可能性があることが示唆された。これらの結果は、日本教育心理学会第 61 回総会 (2019.09.14-16, 日本大学, 発表タイトル: 教職課程への動機づけが教育実習後の教師効力感・アイデンティティにおよぼす影響) において報告し、同志社大学教職課程年報に原著論文としてまとめた (論文タイトル: 教職課程への動機づけが教育実習後の教師効力感・教師アイデンティティにおよぼす影響, 同志社大学教職課程年報, vol9, pp21-33)。</p> <p>2020 年度においても、引き続き 2018・2019 年度と同様の調査を実施し、個人内の変動を検討する予定である。</p>
------------------	---

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	③	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を researchmap (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。	更新日	2020年 5月26日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報 (研究アイデア、知財情報、個人情報) の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 3 月 12 日提出

所 属	職 名	氏 名
免許資格課程センター	准教授	田中 曜次

研 究 題 目	「考え、議論する道德」の授業と評価に関する実証的研究
研 究 成 果 の 概 要	<p>新しい学習指導要領が公示され、「アクティブラーニング」がさまざまな場面で求められている。これに伴い、道德を中心に各教科の授業でも、「議論」や「話し合い」などの活動が行われている。</p> <p>しかしながら、これまで参観してきた多くの授業では、「意見の発表」は行われても、「議論」や「討論」となる場面は少ない。一方、論点を絞り、できるだけ「討論」に近い状況をつくらうとする実践も行われている。しかし、これらの授業では、ある論点についての「是非」や「二者択一」を求める「ディベート」のようなものになることが多い。</p> <p>このように、「意見の発表」をしあうだけの授業の改善はなかなか進んでいない。先のような「ディベート的」な討論については、「意見の打ち消し合い」にしかならないという以前から批判があり、改善が求められている。</p> <p>ディベートの問題点であった、論点を絞ることによって「生徒の思考を制限する」ことについて、改善に取り組みたい。</p>

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	③	① 当初の計画以上に進展している。 ② おおむね順調に進展している。 ③ 当初の計画よりやや遅れている。 ④ 当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表		
大学のすべての教員は、研究業績を researchmap (https://researchmap.jp/) へ入力することとしています。		
・過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、 researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。	更新日	2019年 12月30日

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。